



富山大学「考古学研究室」を退職するにあたって

黒崎 直

私は今年の3月31日に富山大学人文学部を定年退職します。2002年10月に着任して以来8年半、考古学研究室に在職したことになります。考古学研究室の教授としては初代の秋山先生、2代目の宇野先生、3代目の前川先生について4代目となりますが、前の先生方はいずれも定年前に他大学へ転出しておられるので、定年を迎えて大学を去るのは私が初めとなります。そのため「最終講義」やその関連行事などで多くの方々にお手数をかけることになり心苦しく感じています。

私は1964年に立命館大学文学部に入学しました。その年の10月には東京オリンピックが開催されており、すでに50年近くも前のことで驚いています。1年生の夏休み、私は先輩たちに連れられて滋賀県にある横穴式石室墳の発掘調査に参加しました。そこで私は「考古学」に目覚めたようで、以降は大学の授業をおろそかにして各地の発掘現場を駆け回りました。中でも1年生の春休みに参加した「近江国庁跡」の発掘や、2～3年生に参加した滋賀県「大中の湖南遺跡」の発掘と整理作業の経験が、その後の人生を決定づけたようです。

その後1969年に私は奈良国立文化財研究所に就職し、全国各地の遺跡の発掘調査に関わるようになります。就職して数年後に日本列島は「開発ブーム」を迎え、埋蔵文化財の発掘事業が年々増大していきました。地方自治体の埋蔵関係職員数がもの凄いスピードで右肩上がりした時期で、今では嘘のような時代でした。反面、発掘優先で研究面や活用面がおろそかにされ、発掘成果の公表さえ滞ってしまいました。その反動が今、私たちに重くのしかかってきています。

最近、考古学研究室の卒業生の進路がきわめて狭くなった一因もそこにあります。考古学関係者にとってはまことに厳しい状況ですが、以前が「バブル」で、このほうが普通なんだと思えば、それほど悲観的になることもありません。私が大学を卒業した頃もまた、今と同じように「考古学」関係の就職先は極めて限られていました。

だからそんな状況の時ほど、じっくりと考古学の基本を学び技術を習得しておくことが重要だとも思います。学問や研究に王道も近道ありません。学生時代に学んだ基本的な知識と技術が最後には力を発揮するからです。とくに発掘関連の技術は机の上では学べません。多忙な授業時間割ですがその合間を縫っていかに「経験値」を蓄積するかにかかっています。

繰り返して言われるように、考古学は「実物」重視ですから、現地に出かけ遺跡や遺物の本物に触れることが大切です。本や写真で見た「資料」は迫力を欠き、そこから新しい発見はありません。また発掘調査が象徴するように、考古学は一人でできる学問でもあり

ません。先輩や仲間や協力者があってこそ、初めて成立する団体競技です。これも考古学という学問の特徴です。

21世紀になって資格や免許の取得が重要な関心事になり、どうしても座学に比重が偏りがちです。でもそれによってフィールドワークが邪魔者扱いされては困ります。仲間とともに汗を流す昼間の発掘作業、仲間と考古学を語り合う夜間のミーティング。先輩たちが築いてくれた富大「考古学」の良き伝統を反芻して、この厳しい時代を乗り越えましょう。考古学は本当に楽しく魅力ある学問です。

退職後、私は奈良の地に住まい、今しばらく「飛鳥・藤原地域の考古学」を考えてみようと思っています。一方では富山県内での仕事も少し持ち越しています。みなさんにお会いする機会もあるかと思えます。楽しみにしています。

最後になりましたが、考古学研究室の益々の発展をお祈りし、挨拶にかえます。

(2011年3月吉日)

目次

富山大学「考古学研究室」を退職するにあたって

黒崎 直

卒業論文要旨

「土器文様要素から見る集落関係―上山田・天神山式土器様式を対象に―」

及川 実沙子

「富山県縄文時代前期から晩期における石器組成」

小浦方志織

「計測値からみた磨製石庖丁の使用限界について～宮城県・福島県出土の磨製石庖丁を例として～」

鵜野千恵美

「弥生時代の管玉製作における失敗品について～石川県八日市地方遺跡を例として～」

北村 史織

「北陸における磨製石剣の使用実態」

瀬瀬文佳

「人物埴輪の所作についての考察」

生方香織

「五所川原須恵器窯跡群出土の坏に関する一考察～奥羽北半出土の坏との比較から～」

東海林心

「日本における庭園文化の画期と変遷」

百瀬香菜子

黒崎先生最終講義・卒論発表会並びに退職記念パーティー・追コンのおしらせ

編集後記

卒業論文要旨

土器文様要素から見る集落関係 —上山田・天神山式土器様式を対象に—

及川 実沙子

縄文時代の情報の伝播は、土器の器面に表されている文様要素や構造パターン等の一つの情報として扱った場合、モノの直接的なやり取りによる交易、もしくは婚姻関係等の土器の作り手の移動により情報が伝わっていくと考えられる。本稿では、北陸の縄文時代中期中葉に広く分布していた上山田・天神山式土器様式の文様要素の出現頻度や組み合わせ等から、当時の集落・地域関係を明らかにすることを目的とした。

分析方法は今福利恵氏を参考にさせていただいた。分析の基本となる文様要素は対象土器を比較することで抽出し、遺跡や文様要素ごとに文様要素の出現頻度を割り出した。また、文様要素の分布の仕方や文様要素の組み合わせ等からも考察した。

分析結果から上山田・天神山式土器様式文化圏内での中心的地域は、境 A 遺跡を中心とした富山県東部地域、筋生遺跡を中心とした石川県加賀地域、堂ノ前遺跡を中心とした岐阜県飛騨地域であったと推測した。中でも境 A 遺跡は対象遺跡の中でも文様要素の出現頻度が非常に高いことから、上山田・天神山式土器様式文化圏内全体での中心的な遺跡であると考えられる。また、土器文様要素の組み合わせからは富山県東部地域と岐阜県飛騨地域で同じ文様要素の組み合わせを持つ土器が出土していることが分かった。このことから、先に挙げた二つの地域ではモノのやり取りや土器の作り手の移動等の直接的なつながりがあったと考えられる。一方、石川県加賀地域では富山県東部地域と同じ文様要素の組み合わせはあまり見えないが、文様要素の分布の仕方から中継地点(仲介集落)を介した間接的なつながりがあったのではないかと考えられる。このように、上山田・天神山式土器様式文化圏内では富山県境 A 遺跡を中心とした地域を中心に、岐阜県飛騨地域との直接的なつながりと石川県加賀地域との間接的なつながりの 2 種類の集落関係があったのではないだろうか。

富山県縄文時代前期から晩期における石器組成

小浦方志織

石器組成から、立地上の特徴や周辺環境と考え合わせ富山県の縄文前期と中期における生業活動の復元を目指す谷杉廷子氏の研究に加え、私はさらに富山県の後期、晩期の石器組成を検討し、前期から晩期の富山県の地域的・時期における全体的な生業形態を捉えることを目指して研究を行った。石器組成を調べるにあたって、いくつかの問題も含んでいるが以下のように石器を分類した。石鏃、石匙、石槍を狩猟具、打製石斧、磨製石斧、石皿、磨石、凹石を採集具、石錘を漁労具とした。石器の数は各遺跡の報告書に記載されている数を参考にし、出土石器の時期が比較的短期間に絞れ、同時期の石器が20点以上出土する、前期から晩期の遺跡を対象とした。また遺跡の立地についても考察することができよう遺跡を大きく山側、海側、平野の3つの地域に分類した。

分析と考察から、富山県の縄文時代の時期的・地域的な生業の特徴について大まかにではあるが概観した。前期では遺跡間で石器組成に差がみられるが、中期前葉でそれまで優位であった狩猟具が減少し、採集具と漁労具が優位になるという結果が出た。狩猟具は減少傾向ではあるが、低調を維持しながら、晩期まで継続して確認される。中期には漁労具の増加がみられ、特に射水丘陵地域で漁労具の占める割合の高い遺跡が多くみられたことは注目される。射水平野全体が縄文海進期に内湾であったという研究もあり、射水丘陵のすぐそばに海岸線が迫っており、その地域で漁労活動が盛んに行われていたのではないかと考える。また中期から各遺跡で、採集具の割合が高くなるが中でも採集具における打製石斧の占有率は後期、晩期に高くなることがわかった。後期、晩期にかけて平野部に立地する遺跡が増えるが打製石斧の占有率が高くなる地域は平野部だけでなく、山間部でもその傾向が見られた。農耕論とも関わらせ、土堀り具と考えられている打製石斧と平野部への遺跡の立地拡大から打製石斧の増加から農耕の存在を否定できないが、山間部でも同じように打製石斧の占有率が増加することにより、一概には言えないと思われる。

今回の研究では終始、値にのみ着目してしまい、遺跡の性格にまで触れられず、データに偏った論文になってしまった。環境や遺跡の性格にもより踏み込んだ研究を進めていかなければならないと感じた。

最後に、石器組成を用いた研究はそれだけでは生業の本質を語ることはできず、有効な関連諸分野の研究成果とともに活用されることでより成果を期待できる分野であると改めて考えさせられた。

計測値からみた磨製石庖丁の使用限界について
～宮城県・福島県出土の磨製石庖丁を例として～

鵜野千恵美

弥生時代に稲を刈り取るために使用された磨製石庖丁は、研ぎ直しによって使い続けられている石器である。この研ぎ直しを受けている磨製石庖丁が折れることなく使用され続けるとどれほど幅が狭くなるのか、地域による違いがみられるのかについて考察を行った。

対象地域は先行研究のある近畿地方および九州地方を除き、磨製石庖丁の出土が多い東北地方の宮城県と福島県に設定し、磨製石庖丁の使用が一般化したと考えられる弥生時代中期～後期頃に存在したとみられる宮城県の6遺跡、福島県の4遺跡を対象とした。

磨製石庖丁の刃部と平行方向の最大長を長さ、背部から刃部までの最大長を幅として計測し、散布図による分析を行なった。各遺跡別にみた散布図では、宮城県、福島県の両県で長さ10～15 cm前後までは幅4.5 cm付近に点が平行に伸び、長さ17 cm以上は幅5.5 cm付近に存在する傾向が表れ、製作が行われていたと考えられる遺跡と未成品のみられない遺跡との比較では、製作が行われたと考えられる遺跡の方が上記よりも幅が大きかった。また、福島県に原産地の推定がされている粘板岩についての分析結果では、福島県よりも宮城県のものの方が全体的に小さいものが多くみられた。

以上の分析結果から、宮城県、福島県の磨製石庖丁の使用限界値、石材別に見た使用限界値、先行研究との比較の考察を行った。宮城・福島両県における使用限界については「長さ約15 cm以下のものは幅4.5 cm前後になったのを目安に、長さ約17 cm以上のものは幅5.5 cm前後を目安に研ぎ直しをやめ、大半の石庖丁は使用を停止していた」と考えられる。この結果は、先行研究での幅4～4.5 cmを目安に使用を停止していたという結果と大きな違いがみられることなく、ほぼ同じ値がみられたことから、石庖丁の使用をやめる目安に共通認識があったのではないかと推測した。

弥生時代の管玉製作における失敗品について
～石川県八日市地方遺跡を例として～

北村 史織

未成品として分類されている資料には、失敗品も分類されていると考えられる。このことから本論では八日市地方遺跡の管玉未成品を対象に、未成品として分類された資料から失敗品を抽出することを目的とする。

石製品は製作工程が不可逆であるため、製作途中の段階で完成品よりも小さくなってしまった場合、それ以上加工を続けても完成品にはなり得ず、失敗品である。このことから、完成品と未成品の法量比較から失敗品の抽出を行えると考え、未成品の最小厚(径)の計測を行った。また、管玉製作において石材が失敗の原因になるか、石材を 5 つに分類し観察を行った。計測の結果、完成品には直径 0.17 cm 以下の資料が存在しなかったため、「最小厚(径)0.17 cm 以下の未成品＝失敗品」とし、本論における失敗品の認定基準とした。

分析の結果、対象としたどの製作工程にも「失敗品」が含まれていることが明らかになった。しかし、第 2 工程（側面剥離工程）、第 3 工程（研磨工程）の「失敗品」は前工程で「失敗品」の条件を満たす、あるいはそれに近い状態になった資料を次の工程に進めて加工が加えられた資料が多く含まれていた。これは、穿孔具である磨製石針への転用の可能性が考えられる。対して第 4 工程（穿孔工程）の「失敗品」はほぼ全てが穿孔による失敗であった。また、「失敗品」の基準を満たす資料に、質が悪いと考えられる石材が集中する傾向は見られず、管玉製作においては石材が失敗の大きな原因にはならなかったと考える。しかし、工程が進むごとに質が良いと考えられる石材の割合が増加する。これは本遺跡の工人が好んでこの石材を使用した、つまり工人たちの美意識の表れではないかと考えた。また、珪化が不十分な石材の分析結果は本遺跡の工人が石材の硬度に合わせて製作技法を選択していた、あるいは主となる工人とは別系統の工人が存在していることを示していると考えられる。

以上のことから、未成品の中に失敗品が含まれていることが明らかになり、さらに転用品も含まれている可能性が生じた。本論の失敗品認定基準では失敗品全てを抽出出来なかった。そのため、製作途中品だけで構成されていると捉えられてしまう可能性をもつ「未成品」という分類名称ではなく、製作途中に生じた資料を総じて「完成品ではないもの」という意味の「非完成品」という名称を与えたい。

本研究で対象とする弥生時代の磨製石剣は、一般的に石製武器として分類される資料である。しかし、実際に磨製石剣の用途を分類した研究は少ない。そこで、北陸地域を対象に磨製石剣の用途を推定することが、本研究の目的である。

研究方法としては、寺前直人氏の論を参考にさせて頂いた。寺前氏は、器形の決定から刃部形成に至る研磨工程が磨製尖頭器の最終形態の決定において重要な位置を占めることから、断面形と研磨の方向により磨製石剣を 4 分類している。この分類と法量における関係性から、近畿地方における時期差・地域差を見出した。本研究では、この分類と法量との関係に注目し、北陸の磨製石剣の用途を推定する。またそれを他地域と比較することで、北陸の磨製石剣の特徴を見出す。

北陸の磨製石剣を寺前氏の論に従って分類すると、分類不可能と思われる資料の存在が確認できた。それは上記分類では、「断面形が菱形で、刃部形成と外形形成を同時に行うことで、平面中央に明瞭な 1 本の鑄がある A 技法」とされる資料の刃部側縁に外形形成時とは異なる角度の研磨が見られる資料である。片側のみにこの研磨が見られる資料から、必要に応じて研ぎ直された結果だといえる。

また対象資料は両刃を持つにも関わらず、片側に刃こぼれが集中する資料が見られた。また法量から直接把握が可能な資料には、基部の長さが異なる資料や、関の突出が片側に強く見られる資料の存在から、片刃を集中して使用すると考えられるものがある。つまり持ち方が決まっていた可能性があるといえる資料である。使用法としては、切る動作、振り下ろす動作が想定できる。

寺前氏は、北陸を含む日本海沿岸地域には別柄をつけた組合式磨製短剣への志向が強かったとする。同じ志向を持つ地域との比較を行うことで、この特徴の分布する範囲を見出せると考えたため、日本海沿岸地域との比較を行った。結果、日本海沿岸地域からは持ち方が決まっていたと考えられるような資料を見出すことは出来なかった。このため、この特徴は北陸だけに限定できる。

以上のことから、北陸における磨製石剣は武器である「剣」としての使用は考えにくく、「刺突」に使用する概念がなかったといえる。

今後の展望としては、十分に資料を検討することが出来なかったこともあり、北陸以外の地域の検討が必要である。他地域で出土する磨製石剣の分析を行うことで、磨製石剣の用途の地域差・時期差を見出したいと考えている。

人物埴輪の所作についての考察

生方香織

私は塚田良道氏の人物埴輪は 6 世紀の後半になると特定の所作をもたずに両腕を下げるという無所作の埴輪が増加するという研究をみて、埴輪にとって重要な所作がどうして失われてしまったのかということに興味を持ち、人物埴輪をテーマに選びました。

研究方法は二種類で、一つは所作の種類が限られており、数も比較的多い女子埴輪を対象としたものです。対象遺跡の人物埴輪の所作について調べ、どのような所作があるのかを確認して同じ所作を表していると思われるものに分類し、その数と時代ごとの所作の種類割合を調べ表にしました。もう一つは人物埴輪の職や服装に関係なく全体的な所作の傾向をみるために人物埴輪の腕の高さに注目し、人物埴輪の腕が頭、胸、胴、腰のどの高さにあるかをみて分類しました。

この結果 6 世紀後葉になると塚田氏の研究と同じく、無所作のものが大幅に増加していることがわかりました。しかし腕の高さでみると腰よりも胴の位置にあるものが多く、これは腕が短いものや、腰や帯の表現が曖昧なものが多く、6 世紀の前葉や中葉に比べて埴輪の作りが粗雑になっていることが影響していました。また物を持つという所作が時代が後になるにつれて、次第に減少していることがわかりました。これは手をあげる、手を合わせるなどの物を持ち捧げるという所作以外の所作が出現し、次第に多くなっていったためだと思われます。片腕で何かをする所作も後葉になると大幅に減少していましたが、対象遺跡の地域がやや偏っていたこともあり、時代的な変化のよりも地域性が関係する可能性がでてしまいました。

無所作の人物埴輪の増加や、物を持つ所作の減少という人物埴輪の所作の変化の背景として、このころ横穴式石室が普及しはじめたことや、埴輪の所作の種類の変化から竪穴式石室から横穴式石室に変化したことによる儀礼の変化が、関係していると感じました。また無所作の埴輪の増加には、埴輪に粗雑なものが多いことから人物埴輪で儀礼を再現しようという意識が低下し、所作が省略、簡略化されても気にしない被葬者側の思考の変化があったのではないかと考えました。

対象遺跡が時代や地域でややかたよりが出てしまい十分に資料を集めることができなかつたことや、実際に人物埴輪を見に行くことができなかつたことが心残りであり、そこが改善できればまた違う分析が出来たのではないかと反省しています。

五所川原須恵器窯跡群出土の坏に関する一考察
～奥羽北半出土の坏との比較から～

東海林心

青森県五所川原市に所在する五所川原須恵器窯跡群は、平安時代の9世紀後葉頃～10世紀代を通じて操業された国内最北端の須恵器窯跡群である。当時青森の地は、“蝦夷”などと呼ばれており、律令国家圏外にあった。須恵器という国家に密接なつながりがある土器や須恵器窯が、圏外においても展開されていく背景として、こうした技術や系譜と言うものは、出羽国あるいは陸奥国のどちら側から持たされたものであったのだろうか、興味を持った。

坏は須恵器の器種の中でも比較的模倣しやすい、あるいはその器形から製作技術を伝授しやすいものと考えた。そのため当窯跡群において出土した坏を対象として、奥羽北半(現在の秋田県と岩手県)で出土した坏と比較していくことにした。法量の散布図や口縁部の形態などを比較していくことにより、当窯跡群の坏は出羽国北半や陸奥国北半出土の坏の法量や形態などに、どちらがより近似・酷似しているのかを分析した。奥羽北半どちらかに近い様相が得られたのなら、当窯跡群の坏における製作技術や器形の影響は、様相が近い国からもたらされたものだと考える。

比較・分析を行った結果、製作技術の伝播の時間差などを考慮すると、秋田県羽後町七窪窯跡出土須恵器や秋田城跡出土あかやき系土器(秋田城跡の報告書では“赤褐色土器”と記載)の坏の法量や器形が、当窯跡群のものに近いことから、当窯跡群へは出羽国側からの影響が強いという考察に至った。

当窯跡群の坏は、青森県におけるロクロ土師器やあかやき系の土器などと呼ばれる土器群の坏とも法量や器形などが酷似している。青森県において坏などの食膳具は、須恵器よりも先の土器群のほうが比較的が多いため、それらの土器群が製作されていく上で、耐水性という点で須恵器のような土器が必要になったために、製作技術が転用、あるいは相互に影響し合いながら、須恵器が製作されていったものと思われる。

当論文において、坏のみしか扱っていない為に、一元的に系譜論などを述べるのは難しいものと思われ、甕や壺といった貯蔵具なども比較していくことも必要と考える。機会があれば貯蔵具なども分析していければと思っている。

現在日本の庭園文化と言え、文献史料などから分かるように、飛鳥時代からという考えが一般的である。しかし庭園学の研究者の中には、石や水などの使い方や立地選択に注目し、縄文時代の環状列石や、弥生時代の環濠遺跡なども広い意味での庭園と見ることができるという研究者もいる。筆者はその見解に疑問をもち、どのような要素と機能をもったものが庭園と言えるのか、再検討が必要であると感じた。

本論では、庭園とは「石・土・水などの自然要素を用い、それらを鑑賞することに重きを置いた空間である」と「自然要素を用いており、鑑賞だけに限らず、祭祀や儀式など多くのことに用いられる空間である」という現在ある2つの定義を参考に研究を進める。

上記の2つの定義を参考に作った「護岸方法」「水場の形態」「石・土の使用度」「鑑賞点」「鑑賞以外の用途」「自然隔離度」「自然意識度」の7項目を用いて、遺跡ごとにレーダーチャートを作成し、その変化から時代ごとの特徴の変遷や、庭園に不可欠な要素などを分析し、「日本における庭園文化」、「日本独自の庭園文化」のはじまりを導き出したい。

以上の方法を用いて分析した結果、レーダーチャートの形から奈良時代に一番大きな画期が見られ、この形が後世まで続くことがわかった。このことから、奈良時代に「日本庭園」の様式がほぼ整ったと判断し、奈良時代の遺跡の特徴が「日本庭園」の特徴になると考えた。よって「日本庭園」とは「塀・柵などで周囲の自然とは一線を画す空間の中に、建物に付随して造られるものである。不可欠な構成要素は、洲浜または石組護岸の施された曲池と、そこに浮かぶ中島、自然石を用いた景石や石組、導排水施設である流路、計画的に植えられた植物、またそれらを鑑賞する場所である。曲池や流路に見られるように、構成要素には曲線的なデザインが多用されている」と定義づけることができた。

また、古墳時代まで不明瞭であった「鑑賞点」が、飛鳥時代を境に明確になることから、ここにも大きな画期があったと考えた。鑑賞することで美意識を感じられる景観や構成要素が庭園の中にある事や、浄土式庭園など、理想郷を目に見える形で再現した例があるように、庭園というものは人の目に触れることによって初めて意味を持つ空間であり、「鑑賞」は庭園にとって不可欠な要素であることがわかる。この「鑑賞」という用途が始めて明確に確認された時代として、飛鳥時代に日本における「庭園文化」の画期があり、この時代から日本の「庭園文化」が始まった可能性があると考えられる。

平成 22 年度 富山大学考古学研究室 黒崎先生最終講義・卒業論文発表会

日時：平成 23 年 3 月 19 日 12 : 30～

場所：富山大学人文学部 6 番教室

当日のスケジュールは以下のとおりです。お問い合わせなどがありましたら 076-445-6195(富山大学考古学研究室)もしくは tomidaikouko@yahoo.co.jp までご連絡下さい。聴講は無料ですので皆様ふるってご参加ください。

【黒崎先生最終講義】 12 : 30～14 : 00

【卒業論文】 14 : 30～17 : 00

及川実沙子 「土器文様要素から見る集落関係―上山田・天神山式土器様式を対象に―」

北村史織 「弥生時代の管玉製作における失敗品について～石川県八日市地方遺跡を例として～」

瀬瀬文佳 「北陸における磨製石剣の使用実態」

生方香織 「人物埴輪の所作についての考察」

東海林心 「五所川原須恵器窯跡群出土の坏に関する一考察～奥羽北半出土の坏との比較から～」

百瀬香菜子 「日本における庭園文化の画期と変遷」

黒崎先生退職記念パーティー及び追いコンのお知らせ

長かった冬も終わりが近づき、春の気配も感じられますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

さて、以前よりお知らせしておりましたが、富山大学考古学研究室では、3月19日の黒崎先生最終講義・卒業論文発表会の後に退職記念パーティー及び追いコンを行います。ご多忙中とは思いますが、参加していただければ幸いです。

日時：3月19日 18：30～

場所：一次会・・・名鉄トヤマホテル 費用 10000 円(黒崎先生への記念品代も含む)

二次会・・・サワディカフェ ※費用につきましては当日集めます

※お問い合わせ等は tomidaikouko@yahoo.co.jp までご連絡下さい。

名鉄トヤマホテル



サワディカフェ (富山駅前21ビルB1F)



編集後記

寒さも緩み、春の訪れが待たれる頃となりましたが、いかがお過ごしでしょうか。

3月に入り、卒業の季節となりました。お世話になった先輩方と会える日も残りわずかとなり、とても寂しく感じられます。また先輩方にはこの度はお忙しい中、富大考古通信に原稿を提供していただき、ありがとうございました。そして御卒業おめでとうございます。皆様の御健康とますますの御活躍のほどを陰ながら願っております。

そして春は出会いの季節でもあります。研究室には6人の新2年生を迎えることとなりました。パンフ作りなどで忙しい時期となりますが、新たなメンバーと共に研究室内の活動を頑張っていきたいと思っております。

(今井 翔・工藤 海)

富大考古通信 第十号

配信日 2011年3月2日

編集・配信 富山大学人文学部考古学研究室

住所 930-8555 富山市五福3190

TEL 076-445-6195

留守番アクセス 4000 BOX番号 6195

HP <http://www.geocities.jp/tomidaikouko/>

メール tomidaikouko@yahoo.co.jp

※メールつきましては、迷惑メールと区別するためタイトルに必ず「富山大学考古学研究室」と入力して下さい。ご協力よろしくお願いたします。

